

研究としての英語学、授業としての「英語学」： 談話的空所化とその二分析を題材に

山 崎 英 一

キーワード：研究・学問と教育・学習・授業、英語学・英文法

0. 序

昨今の大学が置かれている状況、特に、いわゆる「全入時代」及び、大学のありようにおける力点の変化（教育の重視）とを踏まえ、従来の、時として研究と教育とがパラレルではない関係の改善を図る。より具体的には、英語学における一現象を基に、研究・学問として得られた知見を、授業としての「英語学」で展開し、学生の学習・発展促進へとつなげる一例を検討する。

1. 導入：教材としての「空所化」

かつての大学のイメージの中には、大学教員は、主として学者であり、故に、研究に没頭しているものがあつたと思う。この場合、教師としての側面である授業に関しては、学生の力量等を考えることなく研究内容を丸投げする、ないしは自身の研究よりはるかに概論的な項目を一方的に述べるといったものがあつたと思われる。しかしながら昨今の「全入時代」及び教育重視の現在において、学者としてのありようと同等ないしこれ以上に教師として学生に何をどう教えるかというのは欠かせない視点となっている。この視点の中で、高校ではない、最高学府という位置づけも踏まえて考えれば、何を教えるかの考察に、自身の研究内容も含まれてしかるべきである。しかしながら、学生の力量を考慮に入れないままではかつてのような研究内容のままの提示という未消化に終わらざるを得ない状況となりかねない。一方、英語学を体系的に指導する学科でない限り、授業として「英語学」が開講されている場合でも、学生の力量から自身の研究を扱いにくいという状況もある。本論考は、体系的に英語学を指導できる環境になく、学生も必ずしも英語学やその基礎となる英文法に自信や知識・理解があるとは限らないという状況を前提に、「研究対授業」を「研究から授業」につなげる例を検討する。

具体的な検討例として以下では、空所化 (gapping) の特異な例 (以下便宜上「談話的空所化」と呼ぶ) を取り上げる。空所化自体は、英語学において主に統語論の領域で有名な現象である。空所化とは等位接続された節が同一の要素を含む場合、そのうちの一つを残し、他を削除する規則をいう (荒木 (1999))。空所化していない文の例である (1a) に対し、空所化している例が (1b) である。

- (1) a. I ate fish, Bill ate rice, and Harry ate roast beef.
 b. I ate fish, Bill ϕ rice, and Harry ϕ roast beef. (大塚ら (1982). ϕ 記号付与)

従来的にはこれは統語論において有名な現象であり、学徒のイメージとしては、純統語論的に扱うものであると考えることが多いと思われる。

これに関し、本論考では空所化の特殊例である「談話的空所化」を扱う。ここでは、発話者が第一連言肢とそれ以外（の第二連言肢やそれ以降）とで異なる。例えば例としては (2) となる ((2a) の発話命題が第一連言肢、(2b) のand以降の命題が第二連言肢)。なお、本論考でなぜこの現象を具体的題材として取り上げる価値があるかについては3節で述べる。

- (2) a. Jorge: Ivan is now going to peel an apple.
 b. Ivan: And Jorge ϕ an orange. (McCawley (1988))

McCawley (1988) (以下M) はこのような空所化の例も、話者が一人の場合と状況が平行であると主張している。すなわち、等位接続詞のない (3a) は容認不可で、また、二つ以上の連言肢がある場合、空所化は二つ目以降の連言肢全てに関与する場合のみ可能となり、これらは同一発話者による連言の場合と同じである：

- (3) a. Jorge: Ivan is now going to peel an orange.
 Ivan: *Jorge ϕ an orange.
 b. Jorge: Ivan is now going to peel an orange.
 Ivan: George ϕ an orange.
 Geoff: {And Jorge (*is going to peel) a banana. / *And Jorge is going to shell some nuts.}
 (McCawley (1988))

なお、当然であるが、話者が複数にまたがる場合、文の範疇をまたぐことになり、従来的な、一つの文内の構造を検討するのが基本である統語論では扱いが困難となる。¹

また、M曰く、上記 (2) の第二話者 (Ivan) の発話の真理条件は、彼自身の発話内容のみならず、第一話者 (Jorge) の発話内容にも依存している。そこで例えば (4) において、第二話者 (Ivan) の連言肢の内容が真であるにも関わらず、第一話者のみならず第二話者も嘘をついていることになる (ちなみに、DetroitはNebraskaではなくMichigan州の州都であり、BostonはMassachusettsの州都である)。

- (4) Jorge: Detroit is in Nebraska.
 Ivan: And Boston ϕ in Massachusetts. (McCawley (1988))

このような、統語論での空所化と平行な現象でありながら、話者をまたぐことから、か

なり異質にも見える談話的空所化を題材に、以下二節に渡り、非統語論的な観点からの分析として、大きく異なる二つの分析を紹介する。その後、この特殊例とその分析の授業での利用を検討することで、研究から授業への活用を考える。

2. McCawley (1988) による分析：「話者制限説」

上記でMcCawley (1988) (以降M) により紹介された「談話的空所化」に関する、M自身による分析を紹介する。² 多彩な学者であったMcCawley氏の流儀を規定するのは必ずしも容易ではないが、主張時期や内容等から、生成意味論から機能文法へ展開し、更に語用論的観点を取り込んでいる立場と言える。この観点からの氏は、問題の現象に対し、(1988)において“speaker (話者)”の下位区分的視点から分析を試みている。

まず、MはErving Goffmanの70年代の研究にならい、speaker (話者) という用語は次の三つの役割が融合しているものとする：

- (5) author (作成者. Au) : 発話される語を組み合わせる人³
- animator (動作者. An) : 語を発話する人
- principal (主役. Pr) : 語を発することを通じて、例えば、約束したり命令を下したりする人

通例は同一の人物がこれら三役を果たしている (例えば (6))。

- (6) I'll bring some wine to the party.

この文で話者は、語を組み合わせたことでAuであり、発話することでAn、更にこの際ワインを持ってくる義務を担うことでPrでもある。

一方で三役が異なる場合もあり、Mの挙げる状況例として以下の例がある：

- (7) a. Reagan大統領がゴーストライターの書いた演説を行う場合：Reaganが^sPr 兼An、ゴーストライターが^sAu
- b. Edwin Meeseが^s、Reagan大統領自身の書いた、Reaganからの声明を記者団に読み上げる場合：Reaganが^sPr兼Au、Meeseが^sAn
- c. Reagan大統領がゴーストライターの書いた演説を行うという当初予定が、のどの痛みのために、Meeseに代読させることとなる場合：Reaganが^sPr、ゴーストライターが^sAu、Meeseが^sAn

以下に述べるように、Mは (少なくとも談話的) 空所化の分析では、この三役の内特にPrに注目している。

- (7) の各例に個性化される (5) の特にPrが関係しているというMの観点は、一見的外れな

観点である印象を受ける。純統語論的現象として分析されることが多い空所化に類似した現象に、「話者」という統語論と無関係な概念が関係すると主張しているからである。この最初の印象の段階でせいぜい述べるとすれば、文や文を扱う文法という、非現実的な抽象物を扱う統語論的スタンスから、発話や話者、共同での発話作業という、語用論等の諸概念とも親和性の高い、現実的・談話的な物に「文法」を拡張する必要があるということになる（実際には、Mは逆に、談話的な観点が文法の分析にも使えるというスタンスかと思われる）。

いずれにしろ、Mは話者の三役分析から、対象となる談話的空所化の例をとらえなおしている。この点に関し再度(4)をみよう。

(4) Jorge: Detroit is in Nebraska.

Ivan: And Boston ϕ in Massachusetts.

この例に関し、Mは以下のことを示唆している。すなわち、(4)において、両話者は共に、各々連言全体の節のAn（かつおそらくAuでもある）だが、両話者共同で第一話（Jorge）の発話のPrである（coprincipalship）（なお、ひょっとしたら第二話者（Ivan）の発話のPrでもある）。Mの言わんとすることはつまり、Prが発話の効力の責任の担い手であり、第二話者も、真の情報を述べているにもかかわらず、andで会話をつないだことで、間違った情報を述べた第一話者と同じ責任を担っている（「嘘をついた」）ということである。⁴

Mはこの観点からの分析の正当性として(8)を挙げている：

(8) a. A: Hi, I'm Mike Bilandic.

B: And I'm the Easter Bunny.

b. A: Reagan plans to join Amnesty International.

B: And James Watt $\{plans\ to\ join\ /*\ \phi\}$ the Sierra Club.

この両例においては第二話者はandで接続しているが、第一発話、つまり(8a)のAや(8b)のAの発話、にcoprincipalshipは観察されない。この場合、空所化は奇妙であるとしている。

上記のことから、Mは（談話的空所化を含め）空所化一般への制限を次のようなもののようにしている：

(9) 空所化への制限（話者制限説派）

空所化が影響を与える節（つまり第二連言肢以降）のPrが、第一連言肢の節のPrでもなければならぬ。ただし、Anは異なっても構わない。

上記の例に即していえば、（談話的）空所化において、発話者は異なっても良いが、発話の責任は（第一話者はともかく）第二連言肢（以降）の話者にある、ということになる。以降(9)をMの「話者制限説」とし、次節以降他の説と対比していく。ちなみにMは他の省略現象の例

であるVバー削除では、両節でのPrが同一である必要はないとしている。

(10) A: The Yankees will win the World Series.

B: No, the Pirates will ϕ .

(McCawley (1988))

非常に独特な観点からのMの分析に対し、次節では、andそのものを吟味することで、問題の現象の解法を検討する。

3. 関連性理論的視点からの検討：「意味的空仮説」

本節ではSperber & Wilson (1986) を起点とする、現在の語用論の標準理論とされる関連性理論の枠組みからの検討を紹介する。関連性理論は認知理論の一つであり、詳細はかなり難解なところもあるが、今回は、Carston (2002) の「意味的空仮説」に基づく山崎 (2004a, b) の分析を紹介する。

まず、本論考で扱う談話的空所化現象を扱う際、核となる等位接続詞であるandについて検討しよう。ここでの検討は主にCarston (特に2002) (以下C) によるものである。

(11) andの意味論的意味の分析可能性

a. andの意味は概念的である。

b. andの意味は手続き的である。

c. andは概念的意味も手続き的意味も有さない。

Carston (1998, 2002), Blakemore & Carston (1999)

これはandの意味を可能性に沿って提示したものである。(11a) は従来の関連性理論の立場であると共に、従来統語論、意味論、語用論を問わず、広く一般に想定されるものであり、論理学での&と同一ないしそれと関連付けて考察する意味の場合である。(11b) は関連性理論が主張する、「意味は概念とは限らず、その語やそれを含む発話がどう処理されるかを指示する場合がある」という可能性を示したものである。Cは可能性の検討としてあげてはいるが、andに関してはこの立場を支持困難としている。理由としては、「統語的結合が実質、1ユニットで処理することを要請しており、redundantであるから」とする。⁵ (11c) はCが特に興味を持っている可能性例であり、本論考での談話的空所化の分析として使用する立場であり、以下に示す。

なお、関連性理論の標準枠では、(11d) ともいうべき立場の前提である、語が概念的意味と手続き的意味の両方を同時に有する場合があるという観点は通常検討されない。

(11) d. andはdualityを有するものであり、概念的意味も手続き的意味も有する。

学問的に探究する意義はあると考えられるが、本論考の趣旨からはずれるため、関連性理論の

開祖の一人であるWilson（個人談話）による、可能性がないわけではない、ということ述べるにとどめておく。

次に、本論考での談話的空所化現象の分析に重要な、andに関する意味的空仮説をみよう（山崎（2004b））。これはCによる上記（11c）の可能性を追求したものである：

(12) 意味的空仮説 (semantically null hypothesis)

andは概念的意味も手続きの意味も有さない。つまりandには意味論的な情報はない。表面上の様々な「意味」（解釈）は、andの統語的な情報（接続詞として二つ（以上の）統語構造を結合する特性）を基に、関連性の原理という認知的情報原理に沿う形で認知的処理が行われることから生じる。（山崎（2004b改））

この観点では、andの意味にもはや '&' は想定しない。従来の語用論では、andの、例えば 'and then' の解釈を、 '&' を核に+aする形で語用論的に導出してきた（Levinson（1983））が、もはや '&' すら、統語的ないし認知的処理の中で導出する派生物にすぎないとみる。

意味的空仮説は、その極端な立場もあり、説自体まだまだ検証が必要であるが、これを今回の談話的空所化現象に適用し、前節Mの「話者制限説」とは全く異なる分析を紹介する。以降基本的な分析は山崎（2004a, b）による。

上記「意味的空仮説」に基づき、Mが挙げた例を検討していこう。

(2) Jorge: Ivan is now going to peel an apple.

Ivan: And Jorge ϕ an orange.

上記（2）はMが、話者をまたいで空所化が可能であるとして、通常空所化との並行性で導入した例であるが、この例において第二発話（Ivan）が第一発話と '&'（ないしその派生）の意味関係でつながっていることがわかる。⁶

「意味的空仮説」の下では、この例では、意味的に空の状況で認知的発話解釈の段階において、意味論的ではなく語用論的に '&' が導入されることになる。この例のみ見ている状況では、本仮説は一見無駄（つまり最初からandの意味は '&' としておけばよい）で、有益に思えないが、この点に関しては次例で納得がいくと思う。

次に、Mが空所化できない例として挙げた（8 a, b）を検討しよう。

(8) a. A: Hi, I'm Mike Bilandic.

B: And I'm the Easter Bunny.

b. A: Reagan plans to join Amnesty International.

B: And James Watt {plans to join / * ϕ } the Sierra Club.

例をよく吟味すると、(8a)(8b) 共にいわゆるand-Dutchman文であることがわかる。and-DutchmanはDutchman条件文(例は(13))と解釈的にパラレルな関係にある。

(13) If he is a policeman, I'm a Dutchman.

この例において、後件('I'm a Dutchman')は偽の情報を表す。Dutchman条件文は通常の場合と同じ真理条件(つまり'→'としての解釈)利用で説明できることから、条件文の真理条件的に(全体が真で、後件が偽の場合は、前件も偽の場合のみである)、(9)の話者は前件(通話者の話相手の主張が来る)が間違いであることを主張していると理解できる(詳しくは山崎(1996))。

(8a)においても(8b)においても、話者Bの発話のポイントはAの発話内容が受け入れられないことにある。つまり、この場合、Bは偽と思う内容をAの発話(Bの判断では偽)にぶつけつつ、全体として正当な会話(全体としては真)を成立させているのである。

(8a, b)が表現上はandを用いつつも、解釈としては'&'ではなく'→'であることは、「意味的空仮説」の下では容認可能な分析である。つまり、当初からある'&'を取り消して'→'に置き換えるという(問題のある)想定をする必要はなく、andの意味スロット自体は空のまま、発話全体がその解釈過程の結果、'→'を含む情報として処理されるということとなる。^{7,8}

なお、Dutchman条件文やand-Dutchman文において、典型的な使用状況は、後件(and-Dutchman文の場合第二連言肢)が偽であることを通して前件(and-Dutchman文の場合第一連言肢)が偽であることを伝えるわけであるから、当然前件(第一連言肢)が真であるとしての責任は持たない。このことがMの観察におけるPrの有無につながると考えられる。

以上を踏まえ、「意味的空仮説」の下での空所化への制約を以下のようにまとめる：

(14) 空所化への制限(意味的空仮説派)

空所化の発話群において、命題は'&'で連結される必要がある。⁹

この制限の下に、一見(8)に似ているが、Mが空所化不可とした例(4)をみよう。

(4) Jorge: Detroit is in Nebraska.

Ivan: And Boston ϕ in Massachusetts.

(4)も(8)も、第二話者が第一話者の発話内容が間違いであることを主張しているという発話の機能において同様なため、一見すると(8)との違いが分かりにくく、(14)への反例のようにすら見える。が、両者には決定的な違いが二点ある。一つには、(4)の場合、第二話者の発話の命題(第二連言肢)の内容が真であり、(8)でのそれ(見かけ上第二連言肢だが、条件文的に言えば後件)は偽であるという違いであり、もう一つには、(4)では連言全体が偽、(8)は「連言」全体は真であるという違いである(上記Mの描写も参考にされたい)。なお、名前

がないので、(4) のようなタイプを、便宜上「偽命題and真命題なら全体偽命題」と呼んでおく。

参考のため、「→」と「&」の真理条件を記しておく（ここでpは第一発話の命題、qは第二発話の命題とする）：

(15)	$p \rightarrow q$	$p \& q$
a	真 真 真	真 真 真
b	真 偽 偽	真 偽 偽
c	偽 真 真	偽 偽 真
d	偽 真 偽	偽 偽 偽

(8) は「→」としての解釈であり、会話全体は真を伝えるという前提で、第二話者がqが偽である情報を提示することで、(pが真だと思っていた) 第一話者にpも偽であることを伝達している（真理表(15)のdの行の「→」側、「偽・真・偽」を参照のこと）。上記のように「&」の解釈ではない（全体が偽になってしまう）ので空所化は容認されない。

一方ここで問題となっている(4)の場合、Mの指摘するように、第二話者の命題内容は真であるが、andでもって第一発話につなげることで、全体として偽、更に第一話者の命題内容も偽であると（第一話者はともかく）第二話者は主張していることが伝わる（真理表(15)のcの行の「&」側、「偽・偽・真」を参照のこと）。結論的に、Dutchman的解釈、つまり条件文としての解釈を受ける(8)と異なり、(4)のような「偽命題and真命題なら全体偽命題」の類は、全体の解釈が「&」として同定されることから、(14)を補強する例となることはあっても反例とはならないことになる。¹⁰

以上、話者をまたぐ空所化である談話空所化に関し、全く異なる二つのアプローチを見た。次節ではこれら二つの説を利用しての、学生による自主的發展につながりうる授業展開について考えたい。

4. 授業展開への利用

2節及び3節では、特定の現象を全く異なる二つの立場で分析する例を紹介した。本節では、この二説に基づく、次の一手を授業で展開することを検討する。

本論考の立場としては、学問としての英語学（特に理論系）は、他の多くの学問と同様に、学問として結論のはっきりしている領域ではない（つまりいまだ発展中である）。一方で、（大学教育全般としてもそうであろうが）、授業としても結論を重視するのではなく、また知識を伝達すること以上に、学生自身に思考させることが重要なものであると考える。故に授業の際も、各班の「その時に至った、暫定的な結論」への到達過程、思考過程を重視すると共に、それを踏まえて以降も思考するきっかけとなるような展開が望まれると思う。故に、特定の立場、例えば本論考での例でいえば「意味的空仮説」派を説明し、理解させて終わり、のスタンスではなく、学生には対立する立場も理解・検討させると共に、あわよくば、学説の問題点の導出や、現状を超える改善案への到達や今後の課題検討にもつながることを希望したい。

この観点に前節までの例をあてはめた場合に、そもそも論として、出発点である空所化が、いわゆる学校文法でいう「省略」の下位現象であり、学生が興味を持たないのではないかという指摘がなされるかもしれない。興味がないことを出発点として、談話的空所化を経て二分析を踏まえさせ、これらを基に学生の思考を促進しようというのは、いかにも学問が教育とは無関係に探究されているという風にも見るができるかもしれない。¹¹

しかしながら、まずもって、本論考での空所化現象に関しては、(通常的空所化にしる談話的空所化にしる) 統語論的背景 (例えばChomsky派のミニマリスト・プログラム) を全く知らない学生にも導入可能な程度の複雑さである。(1) のような典型的な例から、話者をまたぐ (2) のような例への展開は、必ずしも学生の興味の芽をつむものではない。更に例示した二つの分析方法も、統語論的でない上、比較的直感的にわかりやすく接近しやすいと思われる、機能的・語用論的観点からの分析である。一方で、両説互いにかなり異なっていると共に奇抜な観点すらとっている。故に、Chomsky系統語論が苦手な学生のみならず文法一般に尻込みする学生にも、いずれかの立場には興味を持つ可能性がある。そもそも、一つの現象を、互いに全く異なる観点から分析できる可能性があるということの提示 (つまり解を求める道筋が一つではないばかりか全く似通ってすらいなないこと) が、学問探究が特に思考力の面で教育に貢献できる一つのありようといえ、そのこと自体に教育的意義があると考えてる。

以上、題材として適当でありうるという前提で、授業での具体的な展開や指導を考えたい。この場合、まずは通常的空所化の例の提示と概論的な説明から始め、次いで談話的空所化の紹介、それに続いて「話者制限派の説」及び「意味的空仮説派の説」の紹介及び説明が続くであろう。つまり、まずは上記1節から3節までを学生に教授することが考えられる。¹² これらは、知識的に貢献するという側面や、両派の理解自体での思考力の強化という側面以上に、後の、学生陣自らによる発展のための「思考の種 (food for thought)」として機能する。

現象の基本的な理解及び二つの学説の理解の後の作業としては、例えば、研究者が単独で行う研究過程を細分化し、学生数名の班単位で各下位作業を単独班ないし複数班で協議、検討するという展開が考えられる。この際の、2節、3節の両説を踏まえた後の学生陣による最初の対応として、各下位作業、検討項目を例示する：

(16) 対応例：

- a. 基本的に「話者制限説」に立つ
- b. 基本的に「意味的空仮説」に立つ
- c. 折衷案を考える
両方の立場を少しずつあるいは両方とも成立するとする。
- d. 全く異なる分析を模索する。

原理的にはこの大きく分けて四つの選択肢各々で検討させることが可能であろう。が、全く異なる視点からの二分析であることから、(16c) は実際には可能性のレベルでとどまると思われる。(16d) に関しても、学生が一般に英語学の諸学派になじみが薄いことを考えると、(少な

くとも最初から) 独力で全く新しい分析を構築できるとは考えにくい。

(16c) (16d) の利用の難度も含めて考え、(16a) (16b) へ誘導するとして、例えば次の展開が考えられる。すなわち、当初全体で (16a～d) の項目を概観する。次に、立場を限定し、(16c) の難度と議論しやすくなることから、(16c) の選択肢を消す。当初考えられる難度も踏まえ、(16d) も当座検討しない方向で指導する。結論的に残る (16a) と (16b) の二派の班に分かれ、班対抗で検証等の検討を行わせるようにする。なお、このような班対抗の協議の展開次第では、これ以降に、(16d) の検討や、更には (16c) の検討も可能となりえよう。

(16a, b) に絞ったという想定で行うべき各班の検討作業は、基本的に研究者が単独で行う作業と同様と考えることが可能なので、例えば、(16a) (16b) の二派各々で、自身達の立場の支持例や正当化を示唆する他現象を探し、対立班への反例や理論上の問題点を検討する、等がある。班間で成果を競い合わせることで、教員が説明、誘導する場合よりも、利点・難点双方に深い理解が得られ、更に思考が発展していくことも期待できると思われる。

ここで、各班適当な時間の下で議論、検討、リサーチし、その結果を持ち寄ることで次のような意見・立場が予想される：

(17) 展開例：

- a. 自班の立場の強化
- b. 他班の立場の根本的否定の根拠・証拠の提示
- c. 「話者」の概念の細分化は基本的に支持するが、談話的空所化の問題には適用しない。
- d. 「意味的空仮説」の他の語一般への適用は基本的に支持するが、and に関しては適用しない。
- e. 折衷案のヒントが得られる。なお、折衷案は一つとは限らない。
- f. 第3の立場の萌芽、方向性が見える

(17a) はもっともシンプルな展開の場合である。両立場の正当性が高まるが、自班の正当性を訴えるだけであるため、両立場の優劣・決着がつかない(ないし学生のみでは二説のどちらがより正当か判断できない状況で終わる) 可能性も高い。議論慣れしていない学生が多い場合や学生のやる気次第ではこの展開のみになるかもしれない。

(17b) は対立班の正当性を下げることとなり、下げるという方向性の違いはあるが、(17a) と同様、両説での優位性が相対的に変化せず、故に状況次第では学生に勝ち負けが判断できないことになりうる。その一方で、両説を共に大きく下げるような場合には (17f) につながっていくかもしれない。

(17c) は、話者の三役割の有用性(つまり (7) に例示されるような状況の区分) は認めつつも、空所化への制約には直接関係はしないとの立場である。空所化に関し、「話者制限説」(9) を捨てるということになり、「話者制限説」に立った班が最終的にこの意見にいたった場合には、対立班である「意味的空仮説」(12) からの説(14)の正当性を相対的に高めることとなる。なお、三役割を前提に「話者制限説」が成り立っていることから、三役割を否定しつつ「話者制限説」

を支持するという立場は考えにくい。

M自身による、三役割関連の補強例としては、「話者」に加え、「聴者」(hearer)の三役割想定がある。この観点から、Mは、例えばvocative(呼びかけ語)は、発話が聞こえる聴者全体を対象にするのではなく、聴者の内「話しかけられている人」(addressee)に対してなされるとし、役割という理論概念の発展と適用を紹介している。

(17d)は(17c)とは逆に、「話者制限説」の正当性を相対的に高めることとなる。つまり、「意味的空仮説」(12)は支持しつつも、制約(14)自体は捨てるという結論の場合である。ちなみに、「意味的空仮説」(12)を基に談話的空所化への制限(14)を想定してはいるが、両者の内容から、(14)を支持しつつも(12)に対しては否定的であるという派生的立場はあり得るかもしれない。

(12)を補強する例として、学生が想起しやすい例に関しては、いわゆる「命令文+and文」やOM文があげられる。

(18) Run after him at once, and you will catch up with him.

(19) One more can of beer and I'll leave.

通例(18)は条件文的訳語(例「そうすれば」)をあて、(19)も「たら」ないし「後で」等に訳すことが多く、通常のandの解釈とは多少とも異なることを意識させやすい。

(17e, f)は上記(16c, d)にあたり、議論の展開次第のみならず、学生の力量次第であり、なかなか至らせにくいと考えられる。なお、(17a～d)のいずれにしる学生の力量や展開次第では、より細部に至る根拠や問題点に気づく可能性もある(前節までの注を参照されたい)。

体系的に英語学を指導できるカリキュラムにないという前提では、実施前から学生の到達点を予測することは難しい。が、作業ごとに可能な展開及びそこへの誘導方法やそこからの発展方法を吟味することで、初学の学生でもそれなりの到達点を検討することが可能であると思われる。また学問体系の理解を前提としにくい環境においても、年々、短期・長期を問わず留学しやすい環境に変化しつつあることから、学生自身が英語圏にネイティブスピーカーの知人・友人を有している事例も多いと考えられる。支持例、反例の発見や確認には、各人のネイティブの知人にも(礼を失しないという当然の前提の下で)協力を得ることで、より多様な例や考えを持ち寄ることが可能であろう。

5. 結詞

以上、本論考では、学問の授業への適用を検討した。従来、えてして純統語論的現象とみられがちな現象を出発点に、これの特異例を題材にする、互いにかなり異なる分析を紹介した。前節では、それを基に授業への展開を考察した。ある立場を一方的に押し付けて理解させ、受け入れさせて学習作業を終わらせるのではなく、全く異なる立場からのアプローチの可能性に触れさせることで、その後の発展につなげ得ることを検討した。

以上のように研究を研究に終わらせず、授業と切り離れた状態ではない、学生の思考発展を促す題材となりうることを検討した。ここからのフィードバックが、研究そのものへの貢献と、

授業の発展による学生の成長とに役立つならば、「教育重視」の中でも学者としての立ち位置を確固たるものとし続けられるであろう。

注

- 1 McCawley (1988) の出典元の章名は "Discourse Syntax" であり、主張の力点はまさに、このような文をまたぐ、談話の現象を扱える文法の検討にある。具体的な分析は次節で紹介するようになり異なるが、関連性理論のような認知理論の観点から彼の力点をとらえなおせば、認知的・語用論的処理やその制限を含む（表面上）統語的な現象もあるとの主張と言える。
- 2 本節では断りがない限り、分析方法以外に、例も McCawley (1988) によっている。
- 3 訳語は授業での展開を考え便宜上つけたもので定着した専門用語訳とは言い難い。学生の理解等を見ながら表現を調整する必要がある。
- 4 この説明でもまだわかりにくいと思われるが、これは日本語においてこの種の対応構文が難であることによると思われ、次節で少し視点を変えて説明する。
- 5 私見であるが、「統語的結合が1ユニットでの処理を要請する」とすると、butの分析との整合性や、butの分析自体に問題が生じる可能性がある。すなわち、関連性理論においてbutは通常 (b) の立場から、手続き的意味を有するものと考え、かつその内容は「異なるユニットとして処理せよ」であるが、この手続き的意味が、統語的結合からくる要請と対立してしまうことになり、butの分析が難しくなる。更に、この立場から考えると、andもbutも同様に1ユニットとして処理されるよう要請されることから、「同一の意味」が期待されるが、通常両者の意味は同一とは考えられない。
この問題点に関し多少とも有利な考え方としては次のようなものが検討しうる。すなわち、andとbutの「共通の意味」として '&' があり、これが1ユニットとして処理する統語的要請に起因し、更にbutに手続き的意味が加わることにより、「(真理条件的には&として処理したうえで) 推意 (implicature) のレベルで違う処理がされるということが考えられよう。
- 6 ちなみにこの例に関し、Mの説から考えると、空所化が成立している以上、第二発話者であるIvanが、第一発話の方のPrでもあることになる。つまり、Ivanが第一発話の内容も受け入れ、リンゴの皮をむくという仕事を引き受けることになる。多少ともこの正当性がはっきりしない点もあり、つまり第一話者のJorgeの発話にまでIvanがPrとしての責任を担っているかどうか必ずしもはっきりしない。そこで検証作業としては、Prでないことがはっきりする例（反例）を模索すると共に、例えば次例との差の吟味が考えられよう。
 - (a) Jorge: Ivan is now going to peel an apple.
Ivan: And Jorge is going to peel an orange. (非空所化)
 - (b) Jorge: Ivan is now going to peel an apple.
Ivan: Jorge is going to peel an orange. (and接続なし)
 - (c) Jorge: Ivan is now going to peel an apple.
Susan: And Jorge ϕ an orange. (Prが発話内容の作業に関与しない)
- 7 ただし、個々の例において、いかにして問題となる解釈に至ったかの経緯を具体的に検討する必要性はある。
- 8 富永&吉田 (1994) が指摘するように、例えば談話的空所化を含まない (8a) において 'and' がなくともDutchman解釈が可能である。このことは 'and' が意味的には空であり、(他の文脈情報等の補強は必要かもしれないが、) 適切な文脈化では適切に '→' を補った解釈が可能であることを示唆している。

(a) A: Soel is the capital of China.

B: Yeah, Tokyo is the capital of America. (奥田 (1999))

- 9 ここでは談話的空所化への制約としてはいない。これはMの主張のように、単独の発話内の場合も話者をまたぐ場合もパラレルな制約があるという想定によっている。なお、この制限が、従来の語用論において '&' を基に導出される 'and then' 等が解釈の場合にはどうなるかは検討に値する。結果として、「&' で連結される必要がある」ではなく、「→' の関係にあってはならない」のほうが正しい可能性もある。以上の検討項目は4節で考える、授業での展開時にも有益な派生項目と考えられる。
- 10 「偽命題and真命題なら全体偽命題」に関し、二点記しておく。まず、 '&' として考えた場合、第一話者が自身の発話が真であり、第二話者の命題も真、全体も真、という解釈をする可能性が考えられる。この場合、第二話者の発言のポイント（第一話者の発言内容が間違っていることを示唆する）が通じていないこととなる。故に、実際の場面では、より強固に解釈を誘導するような文脈や冗談口調やあざけり口調のようなイントネーションによる補助も必要と考えられる。

また、このような、真の情報を含む連言肢を発話しつつ、相手の（真と勘違いしている）主張をひっくり返すという判断がなかなか困難であることは、日本語に直訳してもピンとこないことが傍証として挙げられるかもしれない。

(a) ジョージ: デトロイトはネブラスカにある。

イバン: ??そしてボストンはマサチューセッツにあるよね。

(b) 太郎: 札幌は青森県にあるよ。

花子: ??そして神戸は兵庫県にあるよね。

(a) (b) 共に、日本語では第二話者の言わんとするポイントが伝わりにくい。

なお、Dutchman条件文の日本語対応版である「へそ茶文」のand文版に関しても、日本語に直訳しにくい。つまり、Bが、自身の偽の発話によって、Aの発話内容も偽であることを主張しているとは解釈しにくいということである。

(c) A: 私、シュワルツェネッガーです。

B: ??そして私はスタローン。

ただし、連結語を、(c') のように、andの対応語から、if...thenのthen、つまり条件文的解釈を示唆する表現に変えると容認性が向上する。本文(8a)が条件文の解釈を受けることを想起された。

(c') A: 私、シュワルツェネッガーです。

B: じゃあ、私はスタローン。

このことも、英語のandの意味が空であることの傍証になると共に、日本語の対応語（「そして」）が空でないことを示唆するかもしれない。ちなみに「偽命題and真命題なら全体偽命題」では「じゃあ」にしても容認性は改善されない：

(b') 太郎: 札幌は青森県にあるよ。

花子: ??じゃあ神戸は兵庫県にあるよね。

- 11 ちなみに、「省略」の下位現象であることから、学生次第では、本節の一部は授業としての「英文法」に関しても使用可能と考え得る。
- 12 学生の力量や必要に応じ説明を補ったり、例を変更する必要はある。例えば、話者の三役に関するMの(7)は人物設定が古すぎる故、現代の政治機構、ないし今の日本等で置き換える必要がある。

主要参考文献

荒木一雄 (編) 1999. 『英語学用語辞典』 東京: 三省堂.

Ariel, Mira 2008. *Pragmatics and Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Blakemore, D. and Carston, R. 1999. "The pragmatics of and-conjunctions: the non-narrative cases." *UCL Working Papers in Linguistics* 11:1-20.
- Carston, R. 1998. *Pragmatics and the Explicit-implicit Distinction*. PhD thesis, University College London.
- Carston, R. 2002. *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell. 『思考と発話：明示的伝達の語用論』内田ら訳（2008）. 研究社
- Levinson, S. C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- McCawley, J. D. 1988. *The Syntactic Phenomena of English* (2 vols.) Chicago: University of Chicago Press.
- 大塚高信, 中島文雄（監）1982. 『新英語学辞典』東京. 研究社.
- Sperber, D. and D. Wilson 1995. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.
- 富永英夫・吉田仁志 1994. 「英語における修辭的文に関する覚え書き」神戸商科大学 『人文論集』第29号, 2, 23-33.
- 奥田隆一 1999. 『英語観察学』 鷹書房弓プレス.
- 山崎英一 2004a. 「Carstonの意味的空仮説についての覚え書」四天王寺国際仏教大学 『紀要』人文社会学部第37号.
- 2004b. 「Carstonの意味的空仮説の意義について」日本語用論学会口頭発表.